

## 秋田自動車道(北上JCT～能代南IC間)開通20周年の整備効果

山形 尚裕 (NEXCO東日本 東北支社 総合企画部 総合企画課 課長)

小島 一恭 (NEXCO東日本 東北支社 総合企画部 総合企画課 課長代理)

大芦 健太 (NEXCO東日本 東北支社 総合企画部 総合企画課 係長)

## 1 はじめに

秋田県を縦断する形で整備された秋田自動車道(以下、「秋田道」)の北上JCT(ジャンクション)～能代南IC(インターチェンジ)間は、2022年9月に開通から20年を迎えた。秋田道は沿線の自動車移動の利便性を向上させ、物・人の流れの変化を生んだだけでなく、商工業や農林水産業、観光業等様々な業界にも影響を与えたと考えられる。本稿では、秋田道の整備がもたらした効果について調査した結果を紹介する。

## 2 秋田道の概要

秋田道は、岩手県北上市の東北自動車道北上JCTを起点に、秋田県を縦断し、小坂町の小坂JCTに至る高速自動車国道及び自動車専用道路の呼称である。秋田道の北上JCTから能代南ICまでの間はNEXCO東日本が維持管理を行っている。秋田道は、1991年に横手ICから秋田南ICまでの開通を皮切りに順次開通し、2002年9月の昭和男鹿半島IC～琴丘森岳IC間の開通をもって現在のNEXCO東日本管理区間が全て開通した。開通以降、秋田道は延べ6,400万台の交通量となり、多くのお客さまにご利用頂いている(図表1)。

## 3 秋田道の整備効果

一般的に高速道路の整備により、走行時間短縮便益、走行経費減少便益、交通事故減少便益といった直接効果に加え、沿道環境の改善や経

図表1 秋田道の開通状況



済活動の活性化などの波及効果も含め様々な間接効果の発現がみられる。今回は、秋田道の整備による様々な効果が具体的にどのような形で発現したのか調査を行った。以下に代表的な事例を紹介する。

## (1) 秋田道沿線の企業立地が増加

秋田道沿線には多くの工業団地が存在する。その中でも横手ICに隣接する柳田工業団地と横手第二工業団地は、秋田道が最初に開通した1991年以降に分譲が開始され、企業の入居が進んでいる。特に、自動車関連企業の進出が増えている(次掲図表2)。

これらの自動車関連企業では、首都圏や仙台港への自動車部品の輸送の際に秋田道を使用しており、安定した輸送が可能になったという声を頂いている。秋田道沿線では今後も企業の誘致や操業が見込まれ、地域振興への寄与が期待されている。

図表2 横手第二工業団地における主な自動車関連企業の進出状況



出典：秋田県HP、秋田自動車道4車線化促進要望書（R2.11.13）、航空写真はGEOSPACE CDS（NTTインフラネット（株））

## (2) 園芸品目の生産拡大を支援

秋田県内では、個別経営で米作依存度の高い農業体質から脱却し、大規模経営で収益性の高い複合型生産構造への転換を加速させる大規模園芸拠点（以下、「園芸メガ団地」）の整備が進んでいる。収益の拡大には農地の集約等の効率化の他、販路拡大やブランド化の戦略も重要とされる。園芸メガ団地で収穫される作物は多種多様であるが、今回、能代山本地域で多く生産される「ねぎ」と横手平鹿地域で多く生産される「生しいたけ」に着目した。

図表3 ねぎと生しいたけの取り扱い実績の推移  
ねぎ取扱金額の推移



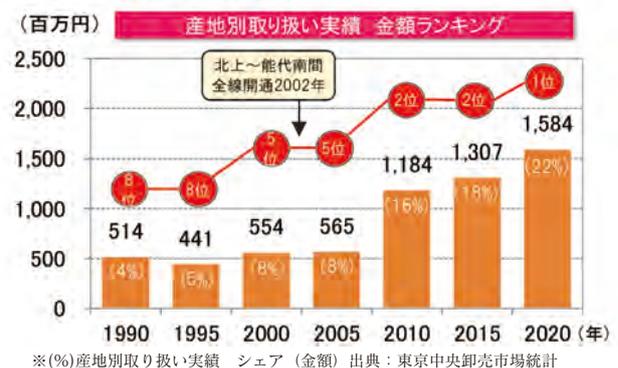
ねぎは、秋田道沿線では能代市の園芸メガ団地で栽培が盛んであり、「白神ねぎ」としてブランド化されている。生産技術の向上もあり、ねぎ・生しいたけのどちらも東京中央卸売市場での取扱シェアを着実に伸ばし、2020年度は、ねぎがシェア4位、生しいたけは1位となった（図表3）。販売額が大きく伸びていることに加え、秋田道の整備により出荷の範囲が広がったとの声もあり、園芸メガ団地による秋田県産農産品の販路拡大、売上増に秋田道も貢献していると考えられる。

## (3) 市民生活を支える店舗商業施設の立地を促進

秋田道の開通以降、現在の国内コンビニエンスストアチェーンにおける売上トップ3社の秋田県への出店が続いた。現在では、上記3社で合わせて400店舗以上が秋田県内で営業している（次掲図表4）。

コンビニエンスストアの出店の条件は来客数だけでなく、商品配送ルートの確立も重要である。コンビニエンスストアチェーンの中には、秋田県内への出店にあたり、秋田道を利用した配送ルートを前提に、岩手県北上市に商品配送の拠点となる倉庫や食品製造工場を建設した事例があり、現在も秋田県内へ配送するルートとして秋田道が利用されている。

生しいたけ取扱金額の推移

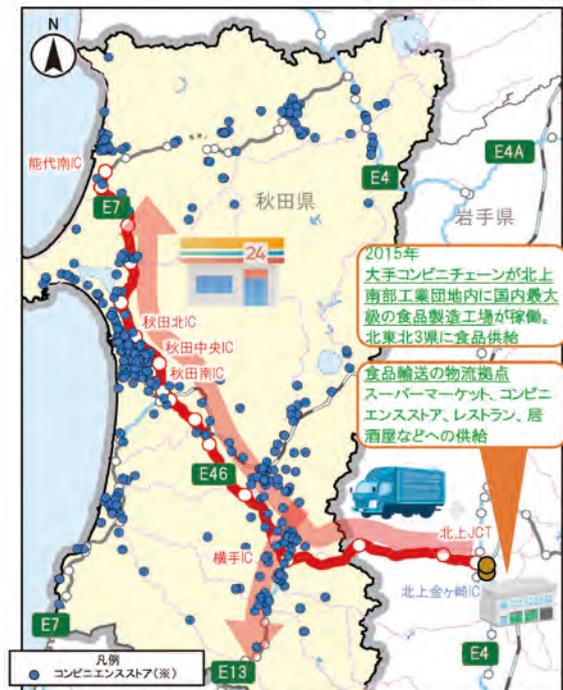


※(%)産地別取り扱い実績 シェア (金額) 出典：東京中央卸売市場統計

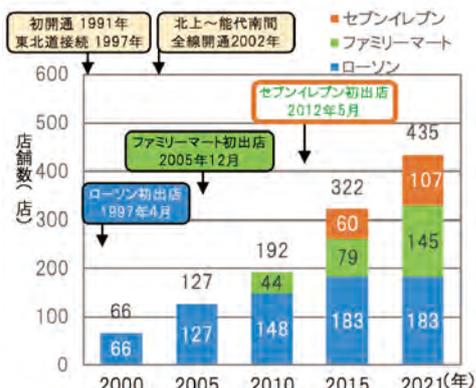
また、2021年にファミリーレストランチェーンの「サイゼリヤ」が秋田県に初めて出店した。サイゼリヤは店内での調理が少なく、主に食品製造工場から配送された食材を温めて盛り付けるセントラルキッチン方式を採用している。野菜や調理済みの商品は福島県白河市の食品製造工場から高速道路を通じて東北地方の各店舗に配送されており、秋田県内の店舗への配送に秋田道が利用されている。

このように、秋田県での生活に欠かすことのできない店舗商業施設の運営を秋田道が支えている。

図表4 コンビニエンスストア分布と店舗数の推移



※コンビニエンスストアはセブンイレブン、ファミリーマート、ローソンを記入  
出典：iタウンページ、企業HP



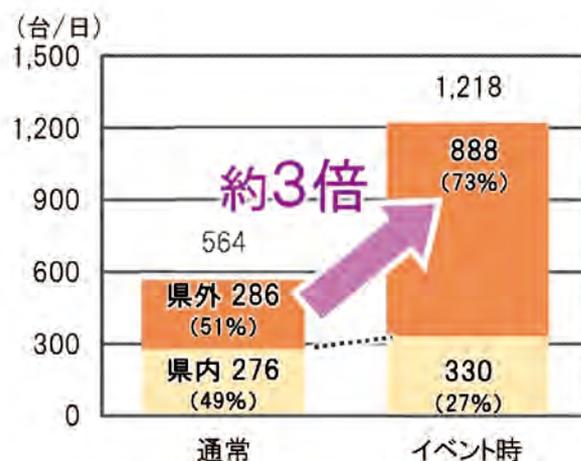
※セブンイレブン、ファミリーマート、ローソンの店舗数 (各年3月末時点) 出典：月刊コンビニ商業界

#### (4) 秋田県の観光・イベントを支える

秋田県は、「大曲の花火」、「秋田竿燈まつり」、「角館の桜まつり」などの有名なイベントや、男鹿など多くの観光資源を有し、年間では延べ3,500万人の来訪がある。秋田道沿線にも観光資源は点在しており、観光目的での利用も多い。

例えば、大曲の花火の開催中期間は大曲ICの出口交通量が通常の約2倍となり、なかでも県外からの交通量は約3倍に増えている。秋田道が観光産業においても、東北各地や関東方面からのアクセスの向上といった重要な役割を果たしている (図表5)。

図表5 「大曲の花火」開催時の大曲IC出口交通量

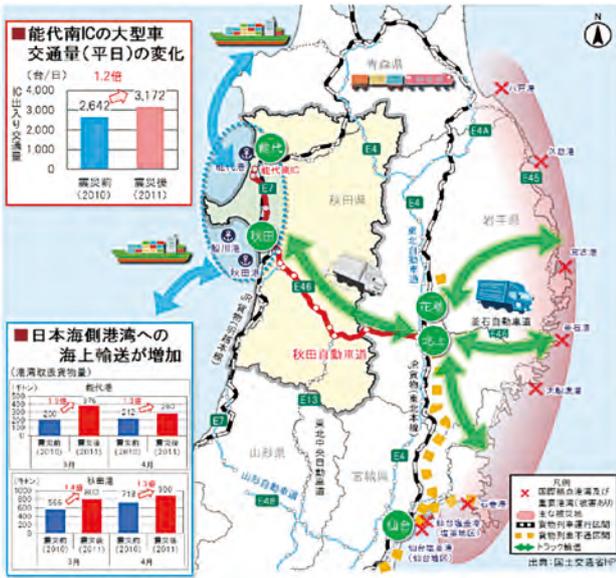


※ICへアクセス交通量より整理 通常時：2019.8.23(金)～24(土)  
花火時：2019.8.30(金)～31(土)

#### (5) 災害時のリダンダンシーを確保

東日本大震災発生直後、被災した太平洋側の港に代わり、秋田港や能代港等の日本海側の港から秋田道を経由し、岩手県や宮城県等の東北地方の内陸部や太平洋沿岸地域へのトラック輸送が実施された。震災前と比べ、日本海側の海上輸送が増加するとともに、能代港の最寄りである能代南ICの交通量が増加している。秋田道が被災地支援や物流におけるリダンダンシー (冗長性) の確保に大きく貢献したと言える (次掲図表6)。

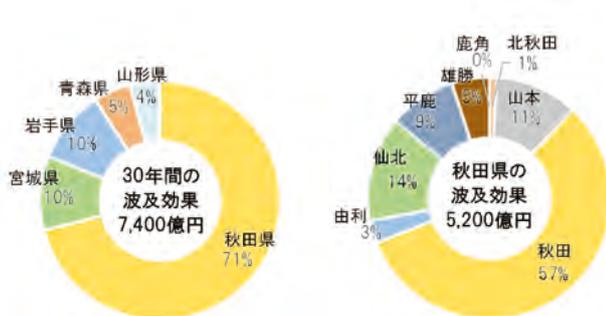
図表6 東日本大震災前後の貨物輸送の変化



#### 4 経済波及効果

これまで紹介したような具体的な効果の他、秋田道の整備が秋田県を含む東北各地へもたらした経済波及効果についても試算を行った。経済波及効果の算出にあたっては、地域計量経済モデルを用い、秋田道の整備による移動時間の短縮といったアクセシビリティ（利用の容易さ）の変化量と地域内総生産の経年変化等各種統計データから、秋田道の整備が与えた影響を効果額として推計した。算出の結果、初開通の1991年から30年の経済波及効果は、秋田県内で約5,200億円、隣県4県を含めた東北5県で約7,400億円となった（図表7）。

図表7 県別・振興局別経済波及効果累積額の割合



また、秋田県内の地域振興局単位では、人口の割合が高く早い時期での開通により効果の発現期間が長い秋田地域が最も多額となった。一方、山本地域は最後の開通区間（昭和男鹿半島IC～琴丘森岳IC間：2002年開通）であり効果の発現期間は短いものの、秋田市への所要時間低減効果が大きいため、比較的開通時期の早かった平鹿地域や仙北地域と同程度の効果額となっている。

#### 5 おわりに

前述のとおり、秋田道は開通以降様々な使われ方により、沿線地域だけでなく秋田県全体に広く整備効果が発現されていると考えられる。

一方で、秋田道は約6割が対面通行区間となっているため、片側2車線区間に比べて、速度低下や対面通行の安全性、通行止めリスク等の課題がある。これらを解消すべく、現在、北上西IC～横手IC間で4車線化工事を進めており、秋田道の安全性・利便性の更なる向上を目指している。NEXCO東日本では、これからも安全・安心・快適・便利な高速道路を提供し、引き続き多くのお客さま、地域の皆さまに愛される秋田道であり続けるために、適切な維持管理・運営及び各事業の推進に努めていく。

最後に、今回の整備効果事例の調査にあたり、秋田県をはじめとする沿線の地方公共団体、企業、団体の皆さまにアンケート・ヒアリングのご協力を頂き、秋田大学理工学部の浜岡教授には調査にあたってのご助言を頂いた。また、一般財団法人秋田経済研究所には経済波及効果の試算にあたり、必要な経済データの提供及び整備効果事例調査に関する多くのご助言を頂いた。ここに感謝の意を表する。